法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-31

中世末期畿内に於ける真宗本願寺教団の発展：紀伊と近江について

金子, 昭弐 / KANEKO, Syoji

(出版者 / Publisher)
法政大学史学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政史学 / 法政史学
(巻 / Volume)
7
(開始ページ / Start Page)
46
(終了ページ / End Page)
56
(発行年 / Year)
1955-06
(URL)
https://doi.org/10.15002/00010656

Hosei University Repository

中世末期畿内における眞宗本願寺教団の發展

――紀伊と近江について――

金子昭貳

一

真宗史の研究については明治以降、今日に至るまで、数多くの研究を見ることができる。が、従来の研究は教義や一向一揆の極めて平面的な戦斗の経過の究明に終つている。しかし戦後笠原一男氏によつて、真宗の発展と一向一揆の必然性を政治的に、また社会経済的基盤からあきらかにされたことは周知の通りである。笠原氏のこの業績によつて、真宗史の研究に輝かしい一ページを加えられた。中世における真宗史の研究は、単に宗教史的なものではなく、中世荘園制の崩壊―純粋封建制社会への変革の歴史を究明する点で注目すべきである。

かかる意味で笠原氏の業績を契機として、最近とみに真宗の発展―一向一揆が活発に論じられるようになり、研究もより深められつつあるが、地域的にはまだ多分の余地が残されおり、真宗教団発展の究明も今後の研究にまつところ大である。

最も先進的といわれる畿内地方については、服部之総氏の「蓮如」と石田善人氏の「畿内の一向一揆について」（日本史研究二三号）、宮崎円遵氏「蓮如上人と紀伊の真宗」（鷲森宗教文化叢書第二輯）を知るのみである。宮崎氏の論文はいまだ見る機会に接しないが、服部・石田両氏の論文は一向一揆の基礎構造について鋭い見解を示されている。しかし真宗の発展―寺院の存立分布については史料的制約に基くものであろうが、充分に明らかにされていない。

本稿は一向一揆の前提たる「畿内における真宗の発展」の一部として紀伊と近江の場合の概略をまとめたものである。全体の研究は機会をみて発表したいと思つている。

この研究は藤井教授をはじめ本学諸先生の叱咤激励と笠原一男氏の懇切な御指導をえてできたものである。厚く御礼を申し上げる次第である。

二

紀伊・近江は中央畿内を南北にはさみ、政治社会経済的に中央

Hosei University Repository

畿内につぐ先進地区に属する。織豊政権確立期における一向一揆に、紀伊門徒の軍事的に経済的に果した役割は大きい。天正五年（一五七七）紀伊門徒の降伏によつて本願寺は最後のとどめをさされた。(1) 近江は寛正六年（一四六五）山門の大谷破却、即ち最初の一向一揆の発生地であり、天文五年（一五三六）守護佐々木六角およびそれと結ぶ日蓮宗教団と近江門徒との斗争、また元亀天正期の一向一揆は近江一円にわたつて展開し、三河北陸門徒の連絡地点としても重要な役割を果した。(2)

中世村落への真宗の発展した北陸をはじめ三河・尾張・美濃・伊勢・飛弾等の中間地区においても在地支配者との一揆が活発に戦われた事実について先学諸氏の明らかにしているところである。(3) 特に畿内は南北朝内乱を前提として、荘園制の崩壊―郷村制の成立が他の地区に比して早く形成を見た地区であり、畿内の農民は土一揆の体験を最初に、しかも数多くの経験を重ねた地帯の農民である。

真宗本願寺教団はこのような郷村農民の中へ―畿内一円に―一五世紀後半から一六世紀末にかけて驚くべき発展を遂げたのである。以下紀伊の場合から見よう。

中世前半の紀伊国は、高野山金剛峰寺をはじめ粉河寺、根来寺、熊野三山、日前国懸両宮などの大社寺の経済的・宗教的に強く支配されていた。百数十の荘園のうち約四分の一は伊都・那賀両郡を主とする高野山領であつた。(4) しかも伊都・那賀両郡地方の荘園は、中世末期に至るまで高野山の支配するところであつた。このような地区は山間で、耕地も極めて少なく四反以下の農民が圧倒的であり、山林労働によつてようやく露命を保つていた(5) 所謂後進性の代表的地方であつた。一方紀ノ川下流の雑賀・和歌山を中心とする海草地方は、高野山・日前国懸両宮の以外にも大野庄に京都勧修寺末の禅林寺、神宮郷紀三井寺の金剛宝寺、栗栖庄の観音寺等に代表される古代宗教は多くの寺領をもち、その勢力を誇つていたが、室町幕府に至つてようやく守護が任命され、応永以後の守護職は畠山氏の世襲するところとなつた。(6) しかし南北朝内乱の波及は、荘園の崩壊、大社寺のおとろえ畠山氏の内訌の激化とともに、荘園内に土着していた荘官・名主層の抬頭により、村落内の権力は次第にこれら土着土豪に交代していつた。(7) このような雑賀・和歌山は紀ノ川のデルタ地帯で、土地生産力も高く、瀬戸内海貿易港として商業資本も早くから進出した。一五八一年の耶蘇会士の通信によると、紀伊国人口の四分の一を占め、農民はヨーロッパの富有な農民に匹敵するといわれる程、(8) 紀伊においては社会的に経済的にもつとも先進地帯である。紀伊において封建的自営農民が著しく成長し、郷村制も他の地方より早く形成をみた雑賀・和歌山地方は、荘園制の崩壊とともに真言宗をはじめ古代宗教もその運命をともにした。それに代つて中世仏教諸宗＝浄土・禅・真宗＝が急速に進出していつた。これら中世仏教の中で真宗本願寺教団がもつとも輝かしい発展を遂げた。先にあげた耶蘇会士は、雑賀は富有な農民で、一向宗に属し、神に奉仕することなく、武事にたけていると伝えている。

真宗本願寺教団の紀伊村落への進出は、雑賀・和歌山地区の崩壊しつつある真言宗寺院の獲得からはじまる。この地区における

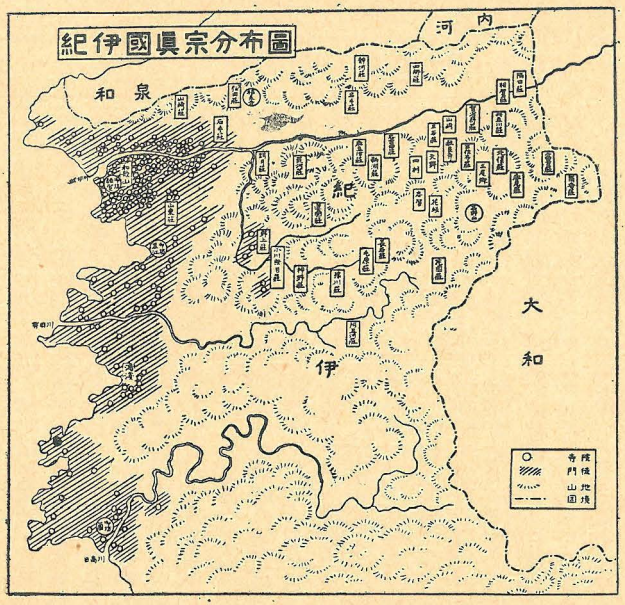
Hosei University Repository

真言宗教団の二十余ヵ寺のうち、十一ヵ寺は真宗本願寺に転宗し、(9) 他の寺院は廃寺か、封建支配者をパトロンとしてて存立を可能ならしめた。まづ本願寺法主三代覚如の弟子たちによつて、康永年間（一三四二―一三四四）に名草郡雑賀真光寺（旧真言宗）の存立から、八代蓮如が文明八年（一四七六）紀伊への布教まで、約一世紀半の間に僅か五ヵ寺の開基を見にる過ない。しかし蓮如一代の布教に（約三十年間）六四ヵ寺という飛躍的増加を見たのである。以後実如の代に三四ヵ寺、証如の代に十一ヵ寺、顕如の代に三二ヵ寺という寺院存立の発展を知ることができる。(10) 即ち、蓮如から顕如の代までの約一世紀半の間に一四一ヵ寺の道場、寺院の開基をみたのである。

こうした紀伊国における真宗本願寺教団発展の状態を表一、分布図によつて考察すると、蓮如以前の五ヵ寺の中、四ヵ寺までが雑賀・和歌山附近にたてられている。蓮如時代の六四ヵ寺の中、四三ヵ寺が雑賀・和歌山を中心とする名草・海部両郡の海岸地帯や紀ノ川下流のデルタ地帯にあり、その他二十一ヵ寺は有田・日高川の下流や海岸附近の地帯に建立されている。実如の時代にも同様に、名草・海部郡に一四ヵ寺、在田郡に一四ヵ寺、日高郡に

表一

法主 / 郡名	覚如	蓮如	実如	証如	顕如	計
名草	1	27	9	8	15	60
海部	3	16	5	2	5	31
在田	0	10	14	0	3	27
日高	1	11	3	1	5	21
那賀	0	0	3	0	2	5
牟婁	0	0	0	0	2	2
伊那	0	0	0	0	0	0
計	5	64	34	11	32	146



Hosei University Repository

三ヵ寺という割合で建立されている。この時代からようやく、高野山金剛峰寺の荘園内である那賀郡に進出を始め、三ヵ寺の設立をみた。しかし顕如の時代の二ヵ寺と合わせて僅か五ヵ寺に過ぎず、また紀伊国のもつとも山間地帯に属する牟婁郡では二ヵ寺を数えるに過ぎない。伊都郡では一ヵ寺の設立をみることすらできない。

このような真宗本願寺教団発展を寺院設立の面からもしられるように、旧仏教の宗教的経済的勢力圏をさけて発展していつたと同時に、高野山金剛峰寺の荘園支配から独立することが困難であつた農民の後進性＝土地生産力の低帯性から生まれるものである。一方真宗本願寺教団のもつとも発展した雑賀・和歌山地帯は、すでに述べたように封建的自営農の成長、郷村制の成立を早くみた地域である。

蓮如以後（一五世紀後半）飛躍的発展をみた紀伊本願寺教団は、雑賀の真光寺、性応寺、冷水浦の了賢寺（後の黒江御坊）、在田郡湯浅村の福蔵寺、日高郡薗御坊の五ヵ寺が、紀伊本願寺内徒の中心であつた。真光寺は覚如の弟子による真言宗からの転宗であり、性応寺も覚如の弟子による天台宗からの転宗である。廃寺か転宗の運命にあつたこれら寺院は真宗に転宗したとはいえ、蓮如に至る一世紀の間は門徒を獲得する力はなかつた。が、しかし社会経済的進展を背景として、畿内、北陸を経て紀伊に布教した蓮如の力と合まつて、末寺道場、門徒農民の組織化に活発な動きを始めた。蓮如から顕如までに、真光寺は紀伊・和泉両国に四十数か寺の末寺をもつに至つた。(11) 性応寺は六〇ヵ寺の末寺、(12) 福蔵寺は三五ヵ寺を数える程の勢力をもつた。(13) 冷水浦了賢寺は文明八年蓮如布教の際に、冷水浦の喜六大夫が蓮如に帰依して、一寺を建立し「南紀ノ宗門ハ此時権興セリ」といわれ同年十月、「真宗ノ仏法庄保ニミチ。又国郡ニ溢ル。道場成トイヘトモ。イマタ開山ノ図像ヲ置ス。今日ユルシ給ハバ可ナ」リと蓮如より了賢寺の寺号を許され、「次方ニ宗門繁昌シケレハ。参詣ノ道俗男女申サク。冷水浦ハ片土ニテ。参詣ノ便悪ケレハ」永正四年の春同郡三上郷黒江村に移して黒江御坊と称した。天文十九年証如の紀伊への遊化に際し「黒江ノ地モ要害ノタメヨロシカラズ候。和歌ノ弥勒寺山尤ヨキ要害ナリ」と伏山の孫市、藤太夫、孫三郎、孫六、岳崎御手穂の教普入道其外雑賀の年寄衆と談合して和歌山に移転したといういきさつをもつ寺院である。(14) 何れにしても鷺森旧事記は誇調の強い記事であるが、了賢は蓮如の諸国有力門徒の一人に数えられている。(15) また寺院移転は、教団発展と本願寺の政治的変化をみるためにも興味深い問題であるが茲ではふれない。

さて黒江御坊の孫市、藤太夫……等は恐らく黒江御坊の有力門徒であつたろう。石山本願寺日記の天文五年の項には黒江御坊の支配をめぐつて、「黒江坊与力衆之中より、去年十八人の衆二坊之事可令馳走申付たる事は、うへより仰付られたる事候哉。然者不及是非候。若又十八人の衆より申上に付而被仰付候哉。就其御歎申上べきとの由事にて、惣中より使七人のぼり候ッ。其儀今日申候□十八人の衆先々の衆馳走仕候へ共、前住御往生の後四五人ニ被仰付候間」(16) と与力衆十八人と長衆八十計で対決するに至り、

Hosei University Repository

「就其は黒江坊之儀惣黒江衆へ預候」(17) と黒江御坊は長衆の支配するところとなつた。

黒江御坊の支配をめぐる問題から、先にあげた孫市、藤太夫、孫三郎、孫六、教普入道などは長衆を代表する四五人で、名主職の身分ではなかろうかと思われる。これら在地与力衆・長衆を中心として、地縁的に宗教的に農民の結合は必然的に強化されていつた。こうした農民の結合が、天文五年日高の土豪玉置・湯川と門徒農民との一揆となり、(18) 天文六年には熊野三山衆と湯川との間に社領の押領をめぐる成敗が行われたとき、熊野三山衆徒は本願寺に対し「雑賀衆、湯川方へ無合力様」(19) に申付けることを要請し、また雑賀衆にも申入れるという状態であつた。雑賀を中心とする紀伊門徒の増加が、日高の土豪湯川直光をして薗御坊を建立し、(20) 在田の土豪湯川直春をして福蔵寺の道場建立(21) をなさしめたのである。

三

中世近江村落への真宗の進出は、嘉禎元年（一二三五）野洲郡木部の叡山の別院、後の真宗一派を形成した木部派の本山錦織寺の住持であり、木部の領主であつた石畠資長が、親鸞の弟子となつて真宗に改宗したのが初めといわれる。その後覚如・存覚の保護により伊賀・伊勢・大和の諸国に四十余力寺の末寺をみる勢力をもつたという。(22) （蓮如の教団発展の時代に本願寺に帰属する）覚如の時代には、伊香郡成信、坂田郡福田寺の覚乗、(23) 蒲生郡日野本誓寺浄慧、(24) 滋賀郡堅田本福寺善道(25) をはじめ各地に寺院・道坊の開基をみたが、蓮如以前においては、各法主の努力にもかかわらず、応永二十年（一四一三）ごろの本願寺は「御本寺様人セキタヘテ、参詣ノ人一人モミエサセタマハズ。サヒ〳〵トスミテオハシマス」(26) というさびれた状態であつた。むしろ真宗の一派である錦織寺や仏光寺派の勢力が強かつた。「シル谷仏光寺コソ、名張エケイズノコロニテ、人民グンシリシテコレニコグル」(27) 繁栄であつた。元来仏光寺は設立以来、渋谷の支配者妙法院の外護と足利尊氏の帰依をえて御供田の寄進もあり、幕府や守護などの支配者をパトロンとしてその繁栄を誇つていた。(28) しかし半世紀後の本願寺は、寛正年間に山門から破却のうきめをみる発展を遂げ、仏光寺、錦織寺もまた本願寺に帰属したのである。更に天文年間の本願寺は、「寺中広大無辺、荘厳只如仏国」(29) といわれる経済的、宗教的発展をみたのである。東山大谷に近い近江において、このような発展を十六世紀末、寺院存立の状態から各宗派別に比較してみると表二の如くである(30)。

表二

本願寺派	401
仏光寺派	49
禅宗	57
日蓮宗	10
浄土宗	132
天台宗	79
真言宗	25

近江本願寺教団の発展は、先にあげた蓮如以前の有力末寺、滋賀郡堅田本福寺、その末寺道場十二門徒、野州郡金森善立寺、蒲生郡日野九ヵ寺または五ヵ寺（本誓寺、興敬寺、正崇寺、明性寺、弘誓寺）(31) 江北十ヵ寺（坂

Hosei University Repository

田郡の福田寺、福勝寺、真宗寺、浄願寺、称名寺、順慶寺、誓願寺。東浅井郡の金光寺、誓願寺、中道場）(32)などを中心に蓮如以後、近江一円に飛躍的な発展をみた。近江本願寺教団の発展を時間的に地域的に考察して見ると表三、分布図の如く、(33)一四六〇年（寛正元）後から急速に寺院または道場の増加を知ることができる。寺院・道場の分布も紀伊の場合と同様に河川の中流から下流にかけての地域と湖水の周辺、湖岸地帯に集中的に存在する。すなわち湖南では宇治川、湖東では野洲川・日野川・犬上川愛知川・江北では姉川、湖西では安曇川等の流域である。

このような土地生産力の高い地帯は中世村落において、封建的自営農の量的増大と質的成長が著しい地帯である。試みに山間地帯の甲賀郡についてみると、本願寺教団十五ヵ寺、浄土宗教団九十二ヵ寺、禅宗教団十五ヵ寺、天台宗教団二十九ヵ寺である(34)。甲賀郡浄土教団の勢力が強固である所以は、経済的社会的後進性による甲賀武士の党的結合を背景として寺院の経営・維持をはかっていた。しかし、このような甲賀郡においても本願寺教団の寺院分布は、野洲川上流で比較的土地生産力の高い地域である。

以上のような本願寺教団の発展は、末寺道場の増加門徒農民の数的増加と比例することは明らかであるが、以下滋賀郡堅田本福寺を中心として本願寺教団発展の過程を考察してみたい。

近江湖西の本願寺門徒の中心、堅田町は十五世紀以降、本福寺の門前町としてまだ港湾町として堅田四方「北ノ切・東ノ切・西ノ切今堅田」という惣の共同結集を行い、殿原―オトナを中心とする惣村であつた。(35)さらに堅田殿原衆は賀茂・貴船と供御関係を結び賀茂領湖岸十二郡を知行した。(36)堅田庄は

表三

年代＼地方	蒲生	愛知	栗太	坂田	神崎	高島	大津	計	紀伊
1300以前	10	0	2	5	3	5	0	25	0
1400以前	6	0	2	10	3	1	1	23	1
1401～20	1	0	1	0	0	0	0	2	1
1421～40	0	0	0	3	0	0	0	3	
1441～60	1	0	2	0	0	1	5	9	3
1461～80	17	1	11	17	5	16	2	69	40
1481～1500	8	4	7	18	0	9	0	46	26
1501～20	13	7	23	17	2	4	4	70	17
1521～40	9	6	4	8	5	2	0	34	15
1541～60	2	7	4	6	10	2	2	33	25
1561～80	9	2	8	17	0	4	3	43	15
1581～1600	6	4	9	14	2	4	5	44	3
計	82	31	73	115	30	48	22	401	146
不明	29	8	6	37	12	8	6	106	
1600以後	26	41	28	74	21	26	10	226	

Hosei University Repository

近江國眞宗教展圖

近江眞宗本願寺教團寺院分布図

古くから山門領で、南北朝以後も山門領護正院の領掌であるといわれ、(37) また康正二年（一四五六）の東大寺文書によると東大寺領であつたといわれる。(38) しかし滋賀郡一円が山門領である以上、堅田も山門の支配下であつたと思われる。山門の経済的・宗教的支配が室町幕府との結びつきによつて持続しえた時期は、堅田も平穏無事であつた。しかし南北朝内乱以後、幕府の政治的・経済的支配のゆるみと同時に荘園領主山門の支配力も弱体化してきた。観応元年（一三五〇）すでに近江奥島の農民は「百姓を坂本によひこし、稲をこかせ、やねいをふかせらるる非法難堪事」(39) と逃散を企てた。また近江押立保郷民等は「就用水之事、及弓矢合戦・仍可有御成敗之事」(40) と在地支配に対して戦いをいどむのである。このような農民の成長は土地生産力の高い平野を中心に特に著しくすすみ、また生産力の極めて低い僻地においても、漁業・林業・耕地堺相論にみられるように村落の自治的団結を通して行われたのである。

堅田庄においても湖中の沖の島の所有権問題をめぐる佐々木六角との紛争で「六角トノハ海ヨリ東地御知行也。堅田ハ湖十二郡ヲ知行致ス。」本福寺由来記 ことを主張して、湖上支配権をまもつた。

荘園領主山門の弱体化とともに、堅田庄にも中世新興仏教が進出した。殿原衆・地待の勢力を背景に臨済宗大徳寺派が、観応二年（一三五二）に地待の寄進による玉泉庵の創立をみて以来荘園

Hosei University Repository

領主の公認の下に伸展していつた。(41) 一方殿原・地侍の支配下にある全人衆の中に真宗本願寺教団は堅田本福寺を中心に発展する。

本福寺は、本福寺由来記・門徒記・跡書等によると、野洲郡三上山の鴨大明の神職で同族の神主を殺害して追われ、領地の家来若干をひきつれて堅田に逃れ山門の特許をえて紺屋を開業した善道が、覚如（一二七〇―一三五一）に帰依して馬場に道場を設立したのをはじめという。本福寺由来記・跡書 本福寺初代善道はやがて滋賀郡一円の紺屋の総元締となり、全人衆の長となつた。二代覚念は応永二年（一三九五）地侍元次から馬場道場の東方の畑を拾七貫で買得する(42) 有得な商人―経済的に社会的に地侍領に成長した。このような経済的に地侍の地位を獲得しつつあつた覚念は、本願寺の衰退ばかりでなく、彼の地位をして禅宗に転宗し、また仏光寺に走つた。本福寺由来記・跡書 しかし、三代法住は存如に師事して本願寺に復帰した。けだしこのような変遷は応永三十年（一四二三）、幕府の足利持氏を討つ抗争が展開し、正長元年（一四二八）には、「凡徳政事自江州沙汰出也」(43) と旧仏教寺院の門跡をして歎ぜしめた時期でもあり、また堅田全人衆が覚念・法住の殿原衆への仲間入りに目をつむつていようはずがない。覚念・法住の経済力も職業的に宗教的に結びつけられた自営化していく農民・商人・手工業者門徒が背景であるならば、所詮他宗への転宗は本福寺の自滅であつた。が、有力門徒につれられて、本福寺法住が、本願寺に帰属したことは、本福寺自身の再建であり、同時に本願寺にとつても教団確立の光でもあつた。土一揆・戦乱の地と化した山城を後にして各地に点在する末寺・門徒を足がかりに、荘園制の崩壊、独立化していく農民層の中へ存如は、蓮如を供に門徒の再確認と教線の拡張に出発する。その中心は堅田本福寺、その末寺道場から湖東・江北の各地に向う。

本願寺に復帰した本福寺法住は、文安四年（一四四四）西東五間、北南五間の屋敷を地侍刃禰左衛門から九貫五百文で買得し、(44) 明応二年（一四九三）の四代明宗の代の屋敷は、六間奥へ十間と拡大されていつた。本福寺門徒記 このような紺屋の総元締の経済的発展と比例して法住門徒も増加していく。すでに法住時代の門徒は滋賀郡一円に発展し、地下十二門徒と称して十二ヵ村―十二組(45) による講的組織のもとに本福寺の維持と本願寺への所役をつとめ、これら十二門徒はそれぞれ道場をもち、伯耆に四〇〇人、因幡に七、八十人、若狭に三十人（門徒記）と他国にも末寺道場と門徒を開拓する有力なオルガナイザーである。「カタヽニ有得ノ人ハ、能登・越中・越後・信濃・出羽・奥州・因幡・伯耆・出雲・丹後・但馬・若狭（越ヵ）」（跡書）活動する油屋・麹屋・桶屋・鍛冶屋・大工等の商人・手工業者であり、名主職・作職で、身分的には客人・旅人・譜代家人・下部人の階層に属していた。由来記門徒記 さらに石田善人氏の「本福寺寺領異動目録」（日本史研究二三号 畿内の一向一揆について）の分析によると、法住門徒の大北兵衛 麹屋太郎三郎衛門・法住の妹妙円とその子小太郎は本福寺と借家人と家主の関係に立ち、油屋又四郎衛門・麹屋太郎三郎衛門・五郎太郎・五郎左衛門・中村の孫太郎は寺領の作人であり、本福寺は寺領を持ち、また自作地も存在する名主職である。作職である

Hosei University Repository

これら門徒は有得な商人であり、経済的余裕のあつた全人衆で本福寺はその長であつた。このような全人衆・譜代家人は、本願寺―本福寺―末寺道場を中心として、経済的に宗教的に結合して在地支配者殿原衆・地侍衆に対抗しながら独立化していく。その結合がより強固に組織化されていくに従い、山門領主及び在地支配者との抗争―一揆の発生となる。

「寛正六年正月九日、山門ノ悪僧。人数ヲ率シ打入ヘキ風聞アル間、御坊中ニ皆々御驚ニテ。イソキ近国遠国へ。ソノ趣ヲ相フレタマフトイヘトモ。ヨモ今明日ニテハアラジト思ヒタマフニヨリ。御番衆十余人ハカリニテ。御門ノ御番ヲ致処ニ。ハヤアクレハ十日ニ。東山大谷殿御坊ヘトテ走入テミレハ。アク僧百五十人ハカリナリ。御近所ノ悪党等モオリヲ得テ。人数ニクワハリ」（由来記）

湖西の本願寺教団は、堅田本福寺を中心に発展していくと同時に、湖東本願寺教団も野洲郡金森の道西、三宅の了西、荒見の性月、赤野井の慶乗、山賀の道場、中村の妙実、矢嶋南の道場、栗太郡安養寺の幸子坊（金ケ森日記抜本福寺門徒記）蒲生郡日野興敬寺（興敬寺文書）江北誓願寺、福田寺（誓願寺文書）などの有力末寺・門徒を中心に発展した。寛正六年、翌文正元年と堅田・金ケ森の湖西・湖東の門徒団の連合は、山門・地侍との連合に対し史上最初の一向一揆を展開し、法住が山門に対して八十貫文の札銭を納めて講和となる。（由来記）

しかし二年後の応仁二年（一四六八）堅田大責―京都を中心とする応仁の乱を契機として崩壊しつつある堅田の地侍が、堅田海賊を統率して将軍義政の花御所造営資材を湖上に襲撃に対し、幕府は山門に相触れ堅田を攻撃した―たがのはずれた幕府またこれと結ぶ土倉・山門の支配に、地侍・全人衆は共同して戦い、結果的には堅田還住に際し、「法住ハ三百八十貫文、法西ハ八十貫文、大北兵衛ハ百二十貫文、塩津兵衛入道法円ハ百貫文」（跡書由来記）と多額の札銭を出し、「万公事辺ノ儀軽重ヲタヾシテ、殿原衆、全人衆タチアヒテ、ワタクシナキ様ニゲンダンヲナス、両方ニカキチカヘイタシアヒ」（由来記）経済的に身分的に同等の権利を獲得した。このように本願寺教団は、有得な商人、名主職・作職など中心に自立化していく農民・商人・手工業者の門徒化―自宅道場の開基によつて、応仁文明以後は更に飛躍的発展をたどるのである。こうした傾向は北陸・東海地区においても、時間的に、地域的に封建的自営農の量的・質的成長と正比例しながら発展したのである。(46)

与えられた紙面も超過したので、文明以後における本福寺の変遷及び湖東・湖北への本願寺教団の発展については他日に譲りたい。

尚本稿の紀伊の部は卒業論文の要約であり、近江の部は一九五一年度文部省科学研究助成補助金による研究の一部で、一九五二年度史学会大会において発表したものであることを附しておく。

註(1)　石山戦争に当つて顯如は、「当国門徒之儀者、毎度一戦に粉骨をつくし、無二比類一上に、ヌケ様之事まて痛入まいらせ候」と紀州門徒の来援を提寸書状を頻繁に出している。（顯如上人文案―石山本願寺日記）

Hosei University Repository

石山攻略が容易でなかつた信長は、「就中南紀雑賀の門徒等、よく鳥銃に調練し、わが軍をくるしむること数々なれば、所詮雑賀を征伐し、其の根を断ち枯さん」と諸大名を召集して天正五年、雑賀攻撃に移つた。かくて雑賀の降伏とともに石山の落城となつて、本願寺は雑賀に移転した。（太田文書―東大史料編纂所所蔵。信長記・総見記・石山本願寺日記）

（2）寛正六年山門の大谷破却は（眞宗全書―本福寺由来記、跡書、門徒記、服部之総氏「蓮如」）がくわしい。天文五年の一揆は（石山本願寺日記、辻善之助「日本佛教史中世編之五」

元亀天正の一揆―江北十ヵ寺一揆は坂田郡箕浦、神崎郡垣見・新村・小川・蒲生郡日野五ヵ寺、野洲郡金ヶ森、守山、浮気、勝部、草津、勢多、堅田、甲賀等の一揆（誓願寺文書、興敬寺文書堅田本福寺旧記、滋賀県史）

（3）笠原一男　日本における農民戦争、眞宗の発展と一向一揆　重松明久　織田政権の成長と長島一揆（名古屋大学文学部記要）井上鋭夫　一向一揆序説（史学雑誌六二ノ三）松山宏　一向一揆の構造とその展開（歴史評論）

（4）江頭恒治　高野山領荘園の研究

（5）小川信　紀伊国鞆淵庄における郷村制成立過程（国史学五二号）

（6）紀伊続風土記　第一輯

（7）伊東多三郎　近世封建制の確立の過程、紀伊国について（社会経済史学　昭和十六年十月号）

伊東氏右論文や紀伊続風土記、南紀古士伝、紀伊国地士由緒書抜によると、中世末の主なる土豪は、海草郡（鈴木孫市―雑賀一揆の指導者、太田、湯橋、楠見、土橋）在田郡（畠山、山崎、神保、小松、白樫）那賀郡（津田、神野、平野）日高郡（湯川、玉置、山地、愛須）等の存在を見ることができる。

（8）耶蘇会の日本年報第二輯

（9）紀伊続風土記

（10）眞宗全書続九、紀伊続風土記

（11）紀伊続風土記

（12）紀伊続風土記

（13）紀伊続風土記

（14）鷺森旧事記

（15）大谷本願寺通記諸弟略伝

（16）石山本願寺日記上巻天文五年五月十四日

（17）石山本願寺日記上巻天文五年十月廿日

（18）石山本願寺日記上巻天文六年九月六日

（19）石山本願寺日記上巻天文六年九月六日

（20）紀伊続風土記第一輯

（21）福蔵寺文書（東大史料編纂所所蔵）

（22）本願寺通記

（23）本願寺通記諸弟略伝

（24）眞宗全書続九蓮如上人御隠棲実記

Hosei University Repository

(25) 本福寺由来記
(26) 本福寺由来記
(27) 本福寺由来記
(28) 服部之総「蓮如」
(29) 二水記、天文元年八月
(30) 県史、郡史、町史。(野洲、甲賀、伊香、犬上、東浅井、滋賀郡は地誌の関係から不十分なので入れない)
(31) 日野町史、蒲生郡史、興敬寺文書
(32) 坂田郡史、誓願寺文書
(33) 野洲、甲賀、伊香、犬上、東浅井、滋賀郡地方の分布は寺社大観眞宗全書近江興地志略による。
(34) 近江興地志略から調べたもので、開基年代は不明なものが多い。しかし寺数だけを見ても本願寺の末寺が、他の地域に比べて非常に少い。
(35) 原田伴彦「中世都市の自治的共同組織について」歴史学研究第一五六号
(36) 石田善人「畿内の一向一揆について」日本史研究二三号
(37) 石田善人「畿内の一向一揆について」日本史研究二三号
(38) 服部之総「蓮如」四二頁
(39) 大島奥津島文書「滋賀県史第五巻」
(40) 薩涼軒日録　寛正五年三月十七日
(41) 大徳寺文書「石田氏前掲論文」
(42) 本福寺文書
(43) 醍湖満済准后日記、応永三十五月九月十八日
(44) 本福寺文書
(45) 正月西浦の法西・二月兄鍛冶屋第道円、三月中村浜の唯賢、四月油屋二郎兵衛法覚・五月五郎左衛門・六月今堅田の伴阿彌七月外戸道場の法覚・八月眞野宿老人(慶了)九月和邇の桶屋明善・十月麴屋太郎衛門・十一月大北兵衛、十二月西浦大道の衆、兄彌太郎、弟藤兵衛(西浦舟大工)次弟三郎大夫、油屋又左衛門、イヲケの尉。以上十二組「本福寺由来記・跡書・門徒記」
(46) 笠原一男「日本における農民戦争」